秋の終わり、毎日のように木の葉は風に吹きちぎられ、ガサゴソ路上に舞っていたのに、12 月に入るとぴたりと止まり静かな夜がやってきた。まるで夜想曲の夜だ。そんな想いがよぎる。ならば、落ち葉が風に舞っていた日はどんな曲にたとえればよいか？円舞曲？いや、そんな優雅な感じじゃないな。クラシックに疎い私にはよいたとえが見つからない。そんなことを考えながら高橋睦郎の『季語百話』を繰っていたら、「木枯」の項に『冬の星座』の歌詞が引いてあった。

「木枯途絶えて冴ゆる空より／地上に降りしく奇(くす)しき光よ／
　ものみな憩えるしじまの中に／きらめきゆれつつ星座はめぐる」

訳詞とはいえ冬の夜のしじまをよくとらえている詞だと思う。

冬の夜は木枯しもなく静かに冷えていく。日中日差しがさんさんと降り注いでも身震いするほど風は冷たい。あたりを見回しても木々は裸の枝を大空に突き立てているだけ。周辺の野辺も枯れ色一色。冬は見るべきものがない。

そう、誰もが「冬は見るべきものがない」と思いがちだが、それは冬の一面でしかない。冬の野を歩いてみれば、つかの間の日差しにも花を開こうとしている草花もあり、もうそこまでやってきている春を待ちきれなくてすでに芽を出している草花もある。いや、今が自分の季節だとばかり絢爛豪華にこの冬を謳歌している植物さえもある。さあ、暖房の中で丸まっていないで、冬の野に出かけて見よう。

【縁起ものの木の実たち】

マンリョウ　ヤブコウジ科　花期：7～8 月　果実；11～4 月

関東地方以西の暖地の林内に自生する常緑低木。直射日光の当たらない半日陰を好む。当団地では、午前中陽がさす東法面にはもちろん、ほとんど陽がささない北法面にも、そして居住区内の植え込みの中にも自生している。

マンリョウは茎の上部に葉がこんもりとつき、その葉の下に赤い実が鈴なりにつく。冬枯れの野に緑濃い葉、そして深紅の艶やかな実はかなりめだち、正月の縁起物として喜ばれる。このように赤い実をつける植物は何種類かあり、昔からこの赤い実は大金にたとえられて、葉蔭に鈴なりに垂れ下がるのはそれこそ大金の万両(マンリョウ)、赤い実が葉の上につくのはそれよりも小額で千両(センリョウ)、わずか数粒の実は十両(ヤブコウジ)にたとえられたりする。これらを以下に紹介していきます。

紅白のマンリョウ　2 号棟南側　1 月 8 日

ところで、マンリョウの赤い実が目立ってきたのは 12 月に入ってから、その中に白いままの実もあった。「時期が早いのかな、これから赤くなるのかな」と不思議に思っていたら、植栽の先輩に「白い実のマンリョウもあるのですよ」と教えられた。なるほどと改めて見直せば確かに白いままに実が入っている感じ。それなら新年の縁起物として紅白対で紹介しよう。法面を何度も見て回ったが、紅白対で 1 枚の写真には納まらない。ま、別々でも仕方がないかとあきらめかけていたら、年が明けてから 2 号棟南側の植え込みの中に紅白対で生えているマンリョウを見つけた。いや対というより、白 1 本に、数本の赤。まるで女房と娘たちに囲まれたどこかの家族みたいだなと一人想像しながら撮ったのが初めに載せた写真です。

マンリョウ

シロミノマンリョウ　（1 月 8 日）

白い実の方はシロミノマンリョウ（白実万両）とよばれる。白い実のほうが赤い実より一回り大きいので、単に色違いというのではなく品種が異なるようだ。また、黄色い実のキミノマンリョウもあるとのこと。

ところで花は 8 月に紹介しましたが、その時は気付かなかったが、マンリョウの花は合弁花（花びらがくっ付いていて、バラバラにならない）とのこと。写真からはとても合弁花には見えない。また、今年の夏を待って確認するしかない。　（参考；①，②，⑬）

センリョウ　センリョウ科　花期；6～7 月　果実；12～3 月

日本各地の山林樹下に自生する。午前中の木漏れ日程度を好み、特に西日をきらう。当地では 6 号棟東側にある。（8 号棟北側の階段脇でも見かけたのだが）

センリョウの特徴は、葉の上に朱赤色の 10 粒ほどの実がかたまってつくのですぐわかる。葉の色は黄緑色に、実は橙がかり、マンリョウに比べ少し明るい感じがする。

(右)　センリョウ　(1 月 1 日)

(上) センリョウの実。実も葉も明るい感じ
(下) センリョウの全体の様子　(6 号棟東側)

正月の縁起物としていつも“千両・万両”と並び称されるが、マンリョウとは科も違い、遠縁の植物。図鑑で花を見ても、小粒でこれが花かと思えるほど。図鑑には、「花には花弁もがくもなく、子房の横に雄しべが 1 個つく」と説明されており、離弁花（花びらが一枚ずつ離れている）に分類されている。花びらがなくても花なのか、なんだか変わった植物の様だ。とにかく見てみないと分からない。花期を待って確認したい。　（参考；①，②，⑥）

ヤブコウジ　ヤブコウジ科　花期；7～8 月　果実；10~11 月

日本全国、山地の林内に生える。当地では東法面に生えているが、高さが 10～20 センチくらいで、地を這うかのように生えているのでよく知った人でないと分かりにくい。それでも常緑小低木で、マンリョウと同じ科の植物。図鑑を見れば、花の様子もマンリョウの花に似ている。こちらも花期を待って確認するしかない。

ヤブコウジ　東法面　(1 月 1 日)

先の植物が“千両・万両”と並び称されているのに比べ、こちらは“十両”。しかし、正月の縁起物として古くから栽培もされ、平安の頃から古典にもその名が見られる。　（参考；②，⑬）

ナンテン　メギ科　花期；5～6 月　果実；10～11 月

分布は茨城県以西。山野に自生しているものもあるが、庭木として植えられているものが多い。山野に生育するものはほとんどが逸出したもので、国内での自生は疑問とする意見もあるとの事。

ナンテンもまた縁起の良い植物で、「難を転じる」の語呂あわせから、無くてはならない庭木である。鎌倉時代頃から垣根や生け花にも使われ、絵画や美術工芸にもとりあげられ、厄除け、薬草にいたるまで、人間生活の身近な植物である。

ナンテン　6 号棟東　(12 月 26 日)

雪国ではユキウサギの目玉に使われたりしているので、冬にも実が残っていてもおかしくないはずなのだが、何度見てまわってもナンテンの赤い実が見つからない。当団地にも法面や居住区に数本生えており、11 月に色づきはじめたのを見ている。12 月の終りには 6 号棟前のナンテンの真赤になった実を見ている。それが最後。1 月に入って赤い実が見つからない。

私の記憶違いなのか、この原稿を書くために、前の写真の位置を確認し再度見に行ったら、わずか 1 個か 2 個残っているだけだった。すべて落ちてしまったのか。園芸書には 11 月から 2 月にかけて果実が見られるとしてあるので、本来なら残っているはず。つまり、赤い実は冬の小鳥にとって得難い餌であるらしいので、たぶんほとんど食べられてしまったのだろう。正月のご馳走だったようだ。我々にとっては残念な事だけれど、ナンテンにとってはそう願ってのことかもしれない。この種の木の実は果肉の部分に発芽抑制物質を含んでいて、そのまま

1 個しか残っていなかった (1 月 18 日)

蒔いても発芽しないのだという。小鳥に果肉を食べられて、いずこかに運ばれ、糞とともに蒔かれてはじめて発芽できるとの事。　（参考；①，②，⑦）

オモト（万年青）　ユリ科　花期；5～7 月　果実；秋

暖地の林の中に生える常緑多年草（こちらは草本です）。赤い実の植物の中に入れたが実は観賞の対象ではなく、濃い緑色のつややかな葉を観賞するため、古くから栽培されてきた。葉にいろいろな模様が入ったものや、形の変わったものなど、園芸品種も非常に多い。昔から何度もブームになるほどもてはやされ、現在では四百品種を超えるまでになっているという。

オモト　東法面　(1 月 1 日)

12 月初め、この植物を東法面で見つけた。また、同じ頃この近くでホトトギスも見つけた。花は盛りを過ぎていた。こんなところに珍しい草花があったと、なかば驚きながら植栽の先輩に聞いたら、ホトトギスはブルーベリーを移植する時に土とともに運ばれたのだろうという。そして、オモトは（園芸種なので）ここに生えているべき植物ではないので、誰かが植えたのではないかという。（ちょっと残念！）

誰かが植えたのか、土とともに運ばれたのかは分からない。こんなことから、「いったい法面の本来の自然とは何なのだろう」と考えてしまった。緑化ブロックの工事に伴い土とともに運ばれてきたハナカタバミ。法面のウメもヒガンバナもアジサイなどの低花木もすべて緑の会が植えたもの。中には植木鉢の土が捨てられた時に種や根として運ばれたものもある。それこそ法面の樹木のすべてが、団地造成の時に計画的に植えられたものだ。それらを外して法面の自然を考えるべきなのか。

それではいったい法面に自生している植物はどんなものがあるのか。小鳥に運ばれたか種がこぼれたりして生えてきた実生の幼木は自生の植物と言えるだろう。そして、カタバミ、ハコベ、タチツボスミレ、ミズヒキ、キンラン・ギンランなどの野草はまぎれもなく自生したもの。また、クズやワルナスビ等の害草は人間が植えたものではない。こんな風に数えていき、人為的な植物を排除したら、小さな野草はよいとして、そこにクズ、ススキ、セイダカアワダチソウなどが被さってきて、それこそ藪か荒れ地でしかなくなってしまう。

「法面の本来の自然」という考え方こそナンセンスなのだ。「里山の自然」というものが、決して原生林でなく、人間の生活の場として開墾された地に、人間と植物・生物が共生して形作られた自然である

ように、法面の自然もまた、人間と植物のほどよい関係を築いて行くべきなのだろう。人間本位に過度に手を加えるのでもなく、かといって放置するのでもなく、どのような法面の自然を作り上げていくかのビジョンも必要となるだろう。それにはまず、法面にどのような植物が生えているのか、日頃から関心を持って見ていく事が大切だと考えている。

【年の初めの草花たち】

あたり一面枯れ草や裸の樹が目につく冬の風景だが、さて今、見頃の花は咲いていないか、どんな植物が見られるか、ちょっとへそ曲がりのナチュラリストにとっては興味津津。1 月 1 日は穏やかに晴れて、風はそれなりに冷たかったが、比較的気温は高くなる予報だった。こんな日こそ植物観察の絶好の日和とさっそく法面を見て回った。

年末ころに半開きの花が見られた**ハナカタバミ**はさすがに花は見られないが、元気な緑艶やかな葉を広げていた。

花はないが緑艶やかなハナカタバミの葉　→

さていちばんの目当ては**カタバミ**、ハナカタバミと同じカタバミ科の植物。本来なら春の草花と共に、直径 8 ミリほどの小さな黄色い花をつけるのだが、年頭のこの日はどんな花を見せるのか。いつもの観察ポイントへ行って見てみると、さすがに冬は全開とまではいかず、花はやや半開き、葉もとじているものも多かった。カタバミは曇りや寒い日は花も葉も

(上) 花も葉も半開きのカタバミ　　(1 月 1 日)

(右) 観察ポイントは、東法面の左下・手前の通路付近

閉じてしまう花である。黄色の小さな 5 弁の花は春になればそれこそどこにでも見られるのだが、この季節はここだけ。東法面の林がとぎれて日が差し込む場所。たぶん北側の林が風よけになって、ここだけ陽だまりになっているのだろう。あちこち見てまわっているのだが、他ではまだ花を見つけていない。

〔参考；カタバミの開花〕カタバミはその日の気象条件や、時刻により、花も葉も開いたり閉じたりする。

陽が当たると開き(12 月 5 日)　北風の寒い日は半開き(1 月 8 日)　陽が差さない北側では (1 月 25 日)

さてここで、“おらが冬”とばかり絢爛豪華な装いを見せる植物をとりあげたい。**サツキ**である。これも本来は春の花で花期は 5～7 月、五月頃に花をつけるのでサツキと呼ばれているこの植物なのに、どうした訳か、色鮮やかに色づき、しかもピンクの花をつけているのだ。同系色なのでぜんぜん目立たない。遠目にはただ紅葉しているだけとしか見えないが、近寄って見ると！

(上) 東法面、紅葉したサツキ
(左) サツキの花　(1 月 1 日)
(下・左右) サツキの紅葉

狂い咲きなのだろうか。図鑑や園芸書にもとくに説明されていない。でも、インターネットを検索す

ると、同じように紅葉し花をつけている写真が見つかるので、特に不思議なことでもないらしい。「紅葉する品種がある」とか、「樹勢の強いものは紅葉しにくい」とかの書き込みもあるが、植物専門のページでもないようなので真偽のほどは分からない。

当団地では東法面の 1 号棟東側付近、2 号棟北側出入り口前、10 号棟北側法面の西端など。見て回ると、鮮やかに色づいている部分もあり、半分ほどしか色づいていない部分、ほとんど色づいていない部分もある。品種が違うのか、これらの理由はわからない。とくかく、理屈抜きでご覧になっていただきたい。

次に取り上げたいのは**ヒサカキ**。花も咲いていないし、実もつけていないし、紅葉もしていない。緑艶やかなこの植物は神社にそなえる榊である。法面や居住区内の所々に生えています。

ヒサカキ　北法面　(1 月 1 日)

その他見られたのは、寒さのためか半分いびつに花を開いた**ノゲシ**(左)、秋にも紹介しました**ヒラドツツジ**もほんの少し紅葉しながら咲いていました(中)。ポツリポツリと枝につく**アベリア**の花(右)、そして**スイセン**はまだつぼみでした。　(写真は 1 月 1 日)

〔追記〕なお、年の初めはまだ厳寒に向かう途上の季節、その後は一段と寒くなり、これらの花も見られなくなったり、色あせたり、咲いていてもほんの少ししか開いていない状態になりました。

【冬を越す植物たち】

冬の野を歩いて出会うのは、これまで見てきたような赤い実の植物や、意外な花だけではありません。生き生きとした野草の芽生えに出会うこともできるのです。

初めにカタバミをとりあげましたが、実は当初考えていたのは**ハコベ**です。かなり寒い春先から咲いているのは以前から見ていますので、もしかしてと期待していたのですが、やはりもう少し時期が早かったようです。写真を見てください。年の初めにはもうこんな生き生きした芽を出しているのです。

(右) ハコベの芽　北進入路脇　(1 月 1 日)

この他にも次の野草の芽もありました。　(1 月 1 日、8 日)

(上左) オオイヌフグリ、右下に隠れているのはヘビイチゴと思われる

(上右) ここには 3 種類が写っている。上はオオイヌフグリ、左の細かい毛に包まれたような葉はオランダミミナグサ、右の丸い葉でしわくちゃみたいな葉がヒメオドリコソウ

(下左) この植物は残念ながら分かりません。

これらは春にかけてどう成長していくのか観察していきたいと思います。

草花には春に芽を出すもの（一年草）もありますが、このように冬(秋)のうちから春を待ちきれずに芽を出してくる植物（二年草）もあるのです。　（秋何月頃から芽を出しているのかは未確認です）

冬を越す植物の話は続きます。次の写真を見てください。

人に踏まれたのか、霜にやられたのか、地面にグターと伸びている草。もう、お分かりの方も多いと思います。不勉強の私は、これらの草は枯れて、春には新しい草の芽が出てくるのだろうと、初めは気にもかけないでいました。お恥ずかしい次第です。ところがこれこそが、冬の厳しさに耐え、春に飛躍していくための、植物の戦略だったのです。

左の写真はハルジオンのロゼット、右はオニノゲシのロゼットです。ハルジオンのロゼットは居住区内にも法面にも圧倒的に多く見られました。（写真は 1 月 25 日）

写真のように、茎をのばさず、株の中心から放射状に多くの葉を地面を這うように広げる姿は、バラの花に見立てられてロゼットと呼ばれています。これらは二年草や多年草に見られます。

秋に芽を出した植物が、冬を越すためになぜロゼットをえらぶのか？

① 地面近くで寒さや乾燥をしのぐため、そして冷たい風の影響を和らげるため。

② 陽の光をいっぱいに受けられるため、冬は他の植物の葉も少ないので好都合。

③ 春に芽を出す植物に先駆けて、いち早く成長を始めることができる。他の植物に邪魔されないで、陽の光をいっぱいに浴びることができる。

④ 牧草地などでは牛や馬に食べられないで済む（らしいです）。

こんな理由を聞くと、「なるほどな、植物って賢いんだな」と思ってしまいます。

さて、他にはこんなロゼットもありました。　　(1 月 25 日、28 日)

ジシバリ

オニタビラコ

アレチノギク

この他に、先にとりあげましたカタバミ、ハナカタバミのように、多年草としてそのままの姿で冬を越す植物もあります。

(上左) ゲンノショウコ　(上右) タチツボスミレ　(下左) ヘビイチゴ　(下右) ハハコグサ

ここまで冬を越す植物たちを見て来ましたが、最後に表にまとめておきます。

	ロゼットをつくらない植物	ロゼットをつくる植物
1 年草	1 年で種から芽が出て花や実をつけて枯れてしまうもの	
1,2 年草	双方の性質をもつもの	
	ハコベ	オニタビラコ
2 年草	秋に発芽してそのまま冬を越し、次の年に花や実をつけて枯れるもの	
	オランダミミナグサ、オオイヌフグリ、ヒメオドリコソウ	オニノゲシ
多年草	根が残り、あるいはそのままの姿で冬を越し、毎年花や実をつける	
	カタバミ、ハナカタバミ、ゲンノショウコ、タチツボスミレ、ハハコグサ、ヘビイチゴ	ハルシオン、ジシバリ

このように冬枯れの野でも、植物はさまざまな形で厳しい冬を越し、躍動する春を待っているのです。なお、多年草には冬に根だけ残して地上部分が枯れてしまう種類もありますが、今回は地上に葉をつ

けている植物のみ扱いました。　　(参考；④，⑱，HP)

【近隣の状況から】

ところで春先の花として取り上げなければならない花木に**ロウバイ**やマンサクがあります。1 月 10 日頃調布にでかけた女房の話ではもうロウバイが咲いていたとの事、1 月半ばのニュースでも神奈川県のどこかでロウバイが見ごろだと報じられていました。この付近ではどうでしょうか。

以前、西公園でマンサクの花は見た事あるので、1 月 13 日、もしかしてと見に行ったが、見当たりませんでした。マンサクは来月頃かもしれません。

1 月 19 日には中央公園の方に見に行きました。北風の強い日でした。これでは枝先の花など写真に撮れないなと思いながら、中央公園→富沢家→グリーンライブセンターへと巡り、そして帰りに奈良原公園を回ってましたがロウバイは見当たりませんでした。

めぼしい出会いは 2 件、西公園の唐木田側斜面の小川のほとりに水仙が咲いていたこと、そしてグリーンライブセンターで**ヒイラギナンテン**を見たこと。（もちろん栽培種の花はいろいろ咲いていましたが）

グリーンライブセンターのヒイラギナンテン　(1 月 19 日)

ヒイラギナンテンの花期は 3～4 月ですので、咲くには早すぎます。品種が違うのか、特別な栽培をしているのかは分かりません。グリーンライブセンターの庭は、北風を除けて陽だまりになっているためかもしれませんが、見事に咲いていました。

ところで、ヒイラギナンテンは当団地でも 5 号棟北側の階段脇に植えられています。(写真下)よく見るとつぼみらしいのが見えますので、花はもう少し待ってみましょう。

5 号棟北側のヒイラギナンテンとつぼみ　　(2 月 3 日)

※　**お詫び**；12 月から 1 月にかけては植物の状態にあまり変化もなく、赤い実の植物の話はいずれの月にも属する話題です。また、前号の 11 月号の報告が大幅に遅れてしまったこともあり、12 月号は欠番としました。ご容赦ください。

【参考書】

①　『大人の園芸　庭木・花木・果樹』　濱野周泰監修　小学館

②　『花の風物誌』　釜江正巳著　八坂書房

④　『山渓ハンディ図鑑１　野に咲く花』林弥栄監修

⑥　『山渓ハンディ図鑑 3　樹に咲く花　離弁花 1』山と渓谷社

⑦　『山渓ハンディ図鑑 4　樹に咲く花　離弁花 2』山と渓谷社

⑧　『葉っぱ・花・樹皮でわかる樹木図鑑』　池田書店

⑬　『山渓ハンディ図鑑 5　樹に咲く花　合弁花・単子葉・裸子植物』山と渓谷社

⑱　『植物はすごい』　田中修著　中公新書

引用している図書名のみ記します。

（石川）